

樋爪氏時代の歴史と遺産

志波城の造営 古代の日本列島では律令政府によって支配領域の拡大が進められた。当時、陸奥国と呼ばれていた東北地方は、国家に服属しない蝦夷（エミシ）が住む未開の土地とされていた。奈良時代以降、東北では各地に置かれた城柵を行政拠点として、東国（近畿以東の諸国）や北陸の各地から柵戸（きのへ）と呼ばれる多数の農民を移住させ開拓を進める一方、帰順した蝦夷を国内諸国に俘囚（ふしゅう）として移住させた。蝦夷に対する政策は、帰順した蝦夷への位階の授与、物資の提供、宴会への招待などの饗給を行う一方、帰服しない蝦夷は軍事力によって制圧するという二面性があり、さらに「夷をもって夷を制する」という政策がとられた。城柵は、蝦夷を統治するために造営した行政・軍事の両面を担う拠点施設であった。

宝亀7年（776）に「志波村」の蝦夷が出羽の国府軍と交戦して敗退させている。志波村の蝦夷は、北上盆地では胆沢地方の蝦夷とともに蝦夷勢力の中心だったと考えられている。しかし、律令政府と蝦夷集団は常に対立・抗争関係にあった訳ではなく、志波村の蝦夷はのちに帰服の意を伝えており、律令政府に帰属を求める蝦夷集団も少なくなかった。

延暦21年（802）、胆沢城（奥州市）を造営した坂上田村麻呂はさらに北進を続け、翌年には東北経営の拠点として志波城（盛岡市）を造営した。志波城は、国府多賀城（宮城県）に匹敵する陸奥国では最大・最北の城柵である。造営と同時に周辺地域の統治体制づくりが開始され、弘仁2年（811）年には斯波（志波）郡が置かれ、中央政府の版図は北上盆地北部まで拡大した。

この征夷事業によって、東国や北陸地方などは軍事動員や農民の東北への移住、食料の供出などで大きな影響を受け続けた。他の諸国でも大量の武器の供出や帰順した蝦夷の移住受入れなどが課され、その社会的な影響は全国に及んだ。征夷事業にともなう経済的負担は、東国や諸国の農民を疲弊させ、公地公民制の動揺につながった。また、国衙（こくが＝諸国の政庁）を中心に武器製作の技術が定着・拡大することにより在地社会に武力が蓄積され、源氏などの武士団が成長する要因となった。

安倍氏・清原氏の台頭 奈良時代の租税は、戸籍・計帳（徴税台帳）を基盤に置いた課税方式であった。平安時代になると、田地の不足、偽籍の増加などによって戸籍・計帳に基づく課税制度が機能しなくなった。このため、政府は律令制の基本であった人別による課税方式から土地別に課税する方式へ転換した。朝廷は税の徴収を国司に委任し、定められた税額を納入している限りは、国司の権限に介入しない方向へと統治機構を変化させていった。

地方に赴任した国司のうち最上席の長は受領（ずりょう）と呼ばれ、公田（国衙領）を名（みょう）という単位へ再編するとともに、有力農民である田堵（たと）へ名田の経営と租税徴収を請け負わせていった。この体制（負名体制）が整備されると、租税収取・軍事などの現地支配の実務は、受領が派遣した目代の監督のもとに地方の豪族から任用された役人である在庁官人に委ねられ、その地位は世襲されていった。

10世紀以降、中央政府による城柵を拠点とした地方支配が崩れ、11世紀の奥羽地方では在庁官人から安倍氏・清原氏の2大豪族が台頭した。しかし、前九年合戦（1051～62）では陸奥国の奥六郡（胆沢・江刺・和賀・稗貫・志波・岩手郡）を基盤とする安倍氏が、約20年後の後三年合戦（1083～1087）では出羽国の山北三郡（仙北・平鹿・雄勝郡）を基盤とする清原氏が、それぞれ陸奥守として派遣された源

氏によって滅ぼされた。

平泉の時代 後三年合戦は、もともと清原氏一族の内部分裂に端を発した戦いに、陸奥守として赴任してきた源義家が介入した戦いである。この合戦の勝利者側の中心人物が平泉藤原氏の初代清衡である。清衡は、前九年合戦で安倍貞任とともに斬首された藤原経清の遺児（母は安倍頼時の娘）である。藤原経清は、源氏の手によって残忍な形で処刑された。清衡は前九年合戦後に敵将である清原武則の長男武貞に再嫁した母の連れ子として養育され、青年期を迎えた。

清衡は後三年合戦で同母弟の家衡に攻められ、妻子が惨殺された。この合戦で清原氏の嫡流として生き残った藤原（清原）清衡は、後三年合戦後の不穏な政治的情勢の下で、陸奥国及び出羽国の押領使として奥六郡及び山北三郡を手中に収めた。それ以後の歴代の平泉藤原氏が押領使・鎮守府将軍・陸奥守に就任することとなった。

藤原清衡は、平泉に居を移し、北方交易を掌握する政権としての威容を示す一方、朝廷に貢物を納め、その安泰を支える姿勢をとりながら、奥州における政治・行政・宗教の拠点を形成していった。

比爪館の誕生 11世紀後半から12世紀は、平泉藤原氏が奥羽で権力を握った世紀である。平泉藤原氏は、安倍氏や清原氏の勢力基盤であった奥六郡の北側に位置する志波郡に一門の樋爪氏を配置した。比爪館は、当時の鎌倉幕府にも認識されていた重要な館で、世界遺産「平泉」の都市理念が平泉の地以外で展開された数少ない事例である。

比爪館の基本的な性格は未だ十分に解明されていないが、四面廂建物跡や囲郭施設の規模や構造などから、平泉以外の北奥羽の地域ではみられない中規模程度の居館として位置づけられ、平泉の柳之御所遺跡に準ずる館と考えられている。

比爪館跡から12世紀初頭の素焼き土器の「かわらけ」が出土しており、その創建時期は柳之御所遺跡とほぼ重なる。比爪館跡は、12世紀初頭段階から平泉藤原氏一族の居館跡と考えられ、北方地域への窓口として重要な機能を果たしたと考えられている。

平泉藤原氏が奥羽で権力を握った12世紀代の遺跡は、中核拠点である平泉やその周辺、樋爪氏が拠点にした紫波町やその周辺のほか、県北や三陸沿岸、青森県域でも確認されている。平泉藤原氏の財政基盤は、金や馬に象徴される北奥羽の豊かな資源と北海道や北東ユーラシア大陸との交易品であった。

平泉藤原氏の時代である12世紀には、北奥羽地方の「防御性集落」と呼ばれる集落は、一様ではないが減少・廃絶する傾向にある。これは争乱が終息していくことを示している。その背景には、戦国大名のように、広範な北方地域の在地領主の支配の正当性や交易権を保障し、国人一揆に似た同盟関係を構築するとともに、地域紛争の調整や警察機能を行行使することによって政治・経済的な求心力を保持し、奥六郡の北に広がる地域を統合する人物の存在が想定される。平泉藤原氏は、北奥羽の在地社会の生活・経済基盤を大きく改変することなく、半独立的な在地勢力と連携しながら交易体制を構築し、その流通拠点の整備を図ったものと考えられる。その機能を行行使できるのは平泉藤原氏であるが、その権限を北方地域で代行したのが樋爪氏であった可能性は十分考えられる。樋爪氏は平泉政権と密接に連携しながら、北奥羽や北海道の領主層との交易・軍事同盟を推進する平泉政権の代行者として、平泉政権を半独立的に支えていた可能性がある。

比爪館跡 比爪館は、『吾妻鏡』では樋爪俊衡の居館として登場する。古記録によれば、俊衡の父清綱は藤原清衡の子または弟と記載され、俊衡は「比爪」の地名を名字としたとされる。

文治5年（1189）の奥州合戦で源頼朝に攻められ、俊衡一族は北方に逃走するが、のちに厨川の陣営に投降した。俊衡は旧領（比爪）を安堵されたが、その具体的な範囲は不明である。

比爪館跡は、東西300m、南北240mの規模で、幅10m前後、深さ約1～2mの大溝で区画された中規模の館跡である。政庁・居館・宗教施設の3つの機能を備えた複合施設として構成されている。規模の違いはあるが、その基本的な機能は平泉館と共通する。

区画の北西部には主殿級の四面廂建物群、北中央部には四面廂建物群や仏堂とみられる宝形造建物、総柱建物、堀や井戸跡などの遺構が確認されている。遺構からは、儀式・宴会などで使われた素焼き土器の「かわらけ」や、漆椀・箸・曲げ物・下駄などの木製品、常滑産・渥美産・珠洲産の国産陶器や中国産陶磁器が出土しており、樋爪氏の勢力の大きさを物語っている。

比爪館跡では、平泉の無量光院と同規模の浄土式庭園と想定される地形が確認され、大荘厳寺（廃寺）の存在が想定されている。寺域内には鎌倉時代に造立された箱清水板碑群（石卒都婆群）と称される石塔が建つ。この中には年号がある絵像碑としては県内最古の不動明王絵像碑や比爪五郎季衡の墓と伝えられている墓碑などが建ち並び、大荘厳寺の影響が想定される。近くには樋爪俊衡が勧請したとされる五郎沼薬師神社や大荘厳寺ゆかりとされる阿弥陀如来坐像を祀る阿弥陀堂が建つ。

五郎沼と周辺の遺産 五郎沼は、平泉の浄土式庭園を意図して構築された園池と考えられ、比爪館の重要な構成要素である。古絵図によれば、現在よりも西方に広がり中島などの存在が確認できる。観音島には樋爪俊衡の持仏とされる千手観音像が祀られていたという伝承がある。この観音像は近くの鳴の堂に安置され、境内には鎌倉末期の乾元（けんげん）2年（1303）の年号を刻む板碑が建つ。比爪館周辺は樋爪氏が滅亡した後も聖域として位置づけられていた。

五郎沼東岸の土堤には、延文6年（1361）の供養碑が建つ。この碑は、五郎沼の土手がたびたび決壊するため、水神の怒りを鎮めるため人柱にされた村の娘を供養するため村人が建てたという。その供養碑が泣き声をあげるといふ伝説も伝えられ、地元では「夜泣き石」と呼んでいる。この夜泣き石の南方には、五郎沼経塚（比爪館経塚・南日詰経塚）が造営されていた。この経塚は、国道4号線に接する五郎沼南東岸の小高い丘にあったため、長らく後期古墳と考えられていた。経筒の外容器である珠洲（すず）産の壺（完形状態）が出土している。

比爪館跡近くの関連遺跡 比爪館跡の周辺には、世界遺産「平泉」に関連する樋爪氏時代の遺跡が北上川の西岸の縁まで連続的に広がっている。比爪館跡の周辺に広がる南日詰小路口遺跡、南日詰大銀遺跡などから当該期の「かわらけ」が出土しており、12世紀の遺跡が比爪館の東側に広がっていたことを物語っている。

近年では北上川緊急治水対策事業に伴い、南日詰大銀Ⅱ遺跡、北日詰城内Ⅰ遺跡、北条館跡の3遺跡の発掘調査が行われ、より深く12世紀の遺跡の解明が進んでいる。3遺跡とも北上川西岸の河岸段

丘上に立地し、北上川支流の平沢川に並行するように連続して位置する。大銀Ⅱ遺跡では、12世紀の「かわらけ」や中国産陶磁器、常滑・渥美産の国産陶器が出土し、周辺遺跡の中では重要な居館であった可能性が高いとされている。城内Ⅰ遺跡からは、掘立柱建物、竪穴建物などが検出されている。

北条館跡は、12世紀の平泉藤原氏時代と戦国時代の遺構や遺物が検出される複合遺跡である。12世紀の遺跡から平泉の柳之御所遺跡と類似する遺構が多数確認されている。土坑の底部付近から、比爪館周辺で出土する赤みを帯びた色を特徴とする「かわらけ」が完全な形で出土している。比爪館中核部からやや離れた下川原Ⅰ遺跡では、12世紀初めから末頃の墓跡から白磁四耳壺の破片や刀子、火葬施設や「かわらけ」の焼成遺構なども検出されている。

比爪館を核として周縁に広がる複数の遺跡群は、北上川西岸の縁まで面的な広がりを持ち、比爪館と密接な関連をもちながら、「第二の平泉」と呼ぶにふさわしい地方拠点としての機能を果たしていたものと想定される。

外縁に広がる関連遺産 比爪館跡は、西を奥羽山脈、東を北上高地に挟まれた北上川西岸近くに位置する。西の奥羽山脈は陸奥国・出羽国を隔て、東の北上高地は奥六郡と海道を分ける。この東西の山系には山岳霊場として寺社が造営され、比爪の東西端を結界するかのよう経塚が営まれた。経塚は末法思想を背景に造営され、町内では山屋館経塚がその典型である。

この両山系の麓を基幹道が南北に縦走する。奥羽山脈の東麓には「安倍道」が、北上高地の西麓には「あづま海道」が古くから交通・交易、情報伝達の機能を果たしてきた。

この両山系の周辺は、ともに古くから産金地として注目されてきた。奥羽山脈の東麓の滝名川流域からも砂金採掘された形跡があり、安倍氏の重要な資金源になった可能性がある。特に北上高地の西側に位置する赤沢・佐比内地区は著名な産金地と知られ、近世に入って盛行し盛岡藩の財政を支えた。

『陸奥話記』には、安倍頼時は源頼義に「首を傾けて給仕す。駿馬・金宝の類を悉く献上し、士卒にも及んだ」と記録されている。この「金宝」の産出地は不明だが、安倍氏の勢力基盤である奥六郡は当時から産金地であったことがこの記録から知られ、志波郡から産出された金であったかも知れない。

樋爪氏時代の当地方の産金に関する記録は確認できないが、院政期の藤原頼長の日記『台記』によって、この時代に気仙郡や奥羽山脈栗駒山麓の金が摂関家に献上されていたことが知られる。安倍氏や清原氏の時代から重視された産金採取は、平泉藤原氏の時代にも引き継がれ、平泉の黄金文化やその栄華を支えていた

町域東部の関連遺産 産金地である佐比内や赤沢地区には、平泉藤原氏時代に砂金を求めて技術者を含む多くの労働者が来住し、多くの集落の形成を促した。赤沢の白山神社や蓮華寺（廃寺）は、産金鎮護、鉱山儀礼、金山従事者の信仰の場としての機能も果たしていた。

白山神社あるいは蓮華寺に祀ったとされる毘沙門天立像と五大明王像が近くの正音寺に安置されている。また、七仏薬師像は赤沢薬師堂に安置されている。いずれも平泉藤原氏・樋爪氏の時代に制作された平安仏とされる。蓮華寺に付属する堂塔には多くの仏像が安置されていたと推測されるが、これらの平安仏はその一部と考えられる。北上川中流域には県内では平安仏が集積する地域であるが、赤沢地区の平安仏はその北

辺に位置する数少ない仏像であり、この地域が奥六郡の北半にありながら仏教文化が早くに開花し、定着した先進地域であったことを示している。明治期の廃仏毀釈運動によって多くの貴重な仏像・仏具・寺院が姿を消した。赤沢の平安仏は廃仏毀釈を免れ、当時の志波地方の信仰を今に伝えてくれる貴重な遺産である。この白山神社や蓮華寺跡周辺には、鎌倉時代の板碑が多く造立され、領主が河村氏に替わっても霊地や聖地と位置付けられ、信仰が引き継がれている。

佐比内熊野神社は、産金地佐比内に鎮座する。征夷時代に坂上田村麻呂が在地神に記紀神話に登場する2神を勧請合祀したと伝えている。この神社も産金鎮護の機能を担ったであろう。

町域西部の関連遺産 志波城の造営にともない、奥羽山脈の東麓には胆沢城と志波城を結ぶ連絡路

(官道)が整備された。この官道(駅路)は、蝦夷の交通路とされる伝承的道路「安倍道」を駅路として踏襲したのか、律令政府によって開発された駅路が安倍道であったのか判然としない。安倍道の沿道には、志和稲荷・志和古稲荷・志和八幡宮・水分神社などが集積し、結界としての役割を果たすような神域空間となっている。八幡・稲荷などを社名としていることから、坂上田村麻呂や源氏一門、斯波氏などの創建や保護を伝えている。これらの神社は、樋爪氏の時代にすでに存在していたのか、同時代史料を欠くため不明である。

新山神社については、別当寺である新山寺とともに、その創建時期は記録的には全く不明であるが、樋爪氏の時代にはすでに存在していた可能性がある。新山神社境内から平安時代末期のものとして推定される円鏡や懸仏(かけぼとけ)の残欠(十一面観世音)が出土している。

懸仏とは、円形の銅版に立体的な浮き彫りの像を取りつけ、吊り懸けて信仰の対象としたものである。平安時代に神仏習合の影響を受けて神鏡に仏が姿を現した形で、御正体(みしょうたい)と呼ばれ、平安時代後期から鎌倉・室町時代にかけて制作された。東北地方では神仏習合や熊野信仰、出羽三山信仰との関係から多くの懸仏が残っている。県内には230点を超す懸仏が確認されている。紫波町では22点が確認されており、そのうち、11点を新山神社が所蔵している。東部の平安仏に対し、西部の懸仏はこの地域を代表する宗教遺産である。

樋爪氏の滅亡

文治3年(1187)、藤原秀衡は死に臨み、4代泰衡に源義経を主君として仕えるよう遺言する。しかし、泰衡は義経を高館に攻め自害に追い込んだ。源頼朝は、義経をかくまったことを口実に平泉藤原氏討伐の兵を挙げた。文治5年(1189)、源頼朝の進軍に対し敗北の報を受けた泰衡は、平泉館に火を放ち逃亡した。

平泉が陥落した後、源頼朝はさらに北上した。『吾妻鏡』によれば、源頼朝が志波郡に侵攻した際、樋爪俊衡は比爪館を焼き払って北方に敗走した。頼朝は、先祖源頼義の佳例にならば、源氏ゆかりの地である陣岡蜂社に陣を置いた。陣岡近くには、称徳天皇の勅願によって創建されたと伝えられる高水寺があり、その鎮守として走湯権現社(走湯神社)や藤原清衡が勧請したとされる大道祖が存在した。同地には現在、蜂神社が鎮座している。また、太陽・月を象った日の輪・月の輪の中島が空濠跡に残る。

逃走した泰衡は、家臣河田次郎の反逆によって討たれ、その首級が頼朝が逗留している陣岡に突然届けられた。『吾妻鏡』の記述からは、泰衡の首は陣岡で懸けられたと読み取れるが、はたしてそうであろうか。前九年合戦では先祖源頼義は、安倍貞任の首級を厨川柵で懸けている。陣岡に7日間逗留した頼朝は、厨川に

兵を進めた。その厨川に樋爪氏一族が投降してきた。樋爪俊衡は赦免されたが、残る一族は流刑され四散した。平泉や比爪を陥落させ、泰衡を討ち取った頼朝はなぜ厨川まで進軍したのだろうか。頼朝は逃走した樋爪氏一族を探索するため厨川まで進軍させたことも想定されるが、安倍貞任を厨川柵に追討した先祖の例を故実として再現するため厨川まで進軍したと考えるのが自然であるが、あくまでも推測である。泰衡の首を懸けることは故実の再現であり、自らを武家の棟梁として位置づける狙いがあったであろう。

『吾妻鏡』では、頼朝の奥州合戦は、「只私の宿意を以て誅亡之故也」と述べている。宿意とは、源氏が前九年合戦・後三年合戦で勝利したにも関わらず、安倍氏の系譜を引く平泉藤原氏の所領となったことである。その無念を晴らす戦いが奥州合戦であった。『吾妻鏡』では、源義経や泰衡は「指（さし）たる朝敵に非（あらず）」と評している。源氏にとって「聖地」とされた志波郡は、奥州合戦後、源氏一門の足利氏に給与し、宿願を果たしたことになる。

12世紀末の日本では、西国を基盤とする平氏、東国を基盤とする源頼朝、奥羽を基盤とする平泉藤原氏の3つの武家政権が分立する状態が生まれていた。平氏政権を滅ぼした後、頼朝政権に対抗する武家政権が平泉藤原氏であった。頼朝政権が平泉藤原氏を滅亡に追い込んだのは、義経追討や義経をかくまったことは口実でしかなく、全国平定の仕上げとして朝廷（後白河法皇）と直接結びついている平泉藤原氏を取り除く必要があったからである。

泰衡の首は、黒漆塗りの首桶に丁重に納められ、中尊寺僧徒に引き渡された。五郎沼のほとりには、中尊寺から株分けされた古代ハスが夏季に大輪の花を咲かせる。このハスの種子はもともと五郎沼に咲いていたハスの種で、ハスの花を泰衡の首桶に手向けたのは五郎沼近くの民であったと地元では伝えている。真偽は別として、後世に伝えていきたいエピソードである。